



百人一首一話

全

(岡山製本)

大正三年六月七日印刷
大正三年六月十日發行

有朋堂文庫
百人一首一夕話
(非賣品)

編輯者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

百人一首一夕話九卷は、尾崎雅嘉の著作にして、百人一首の歌に基き、作者の略傳、歌詞の解釋、及び作者に聯關せる幾多の逸話奇聞を輯め、加ふるに二百十數面の挿畫を以てせるもの也。畫は大石眞虎の描く所、風韻最も掬すべく、歴史畫及び風俗畫の逸品として、世に名高きものの一に居る。

尾崎雅嘉は浪華の人、字を右魚、通稱を春藏といひ、華陽、春陽軒、蘿月、傳古知今堂等の數號あり。書估を以て業とし、傍ら讀書述作を努め、和漢の學に通ぜり。本書の外、著はす所數十卷あり、就中群書一覽の如きは、其最も著名なるもの也。

本書説く所の歌詞の解説を見るに、二三の首肯し難きもの無きにあらずと雖ども、概して懇切平正、初學者を益する所少なからず。殊に其作者に關する逸話奇聞の類は、汎く各種の典籍を涉獵し、最も趣味ある材料を輯集したるものにして、其内容殆んど信據すべきに近く、文亦平明典雅愛誦すべし。

本書は、曩に某文庫が其内容の一部分を拔萃出版したる外、未だ活字本として世に流布す

るものあるを見ず。今本文庫に採録するに當りては、天保四年新刻の木版本を底本として、句讀點を施し、假名遣を統一したる外、事實文格の如きは勿論、振假名、送り假名の類と雖も、殆んど原本施す所のまゝを覆刻し、敢へて私意を以て増減改竄せず。挿畫また悉く寫眞製版として之を本文中に挿入し、小竹の題辭の如き亦之を寫眞に附し、以て原本の致趣を傷はざらん事を期したり。但し原本、作者の略傳に限り、小字を以て之を歌詞の鼈頭に加へたれども、組版の都合上姑く之を作者の次に置きたり。又原本目次の始めに錄する所の書名、卷一、卷七、卷八、卷九は「百人一首一夕話」とし、卷二は一夕話に代ふるに「比登與俄哆里」、卷三は「飛登與我丹理」卷四は「秘斗豫峨他梨」卷五は「飛登世我多利」卷六は「斐刀餘雅太喇」なる萬葉假名を以てせりと雖も、體裁上姑く「百人一首一夕話」の文字を以て統一する事となしたり。讀者請ふ之を諒せよ。

大正三年五月

校訂者 塚 本 哲 三

百人一首一夕話 目錄

卷一		三——八二
卷二		八三——一六八
卷三		一六九——二五七
卷四		二五九——三四七
卷五		三四九——四三七
卷六		四三九——五一二
卷七		五一三——五九九
卷八		六〇一——六八二
卷九		六八三——七六九

内容細目

○和歌

上旬五言

ア	あきかぜに	五三
	あきのたの	一五
	あけぬれば	三六
	あさぢふの	二八一
	あさぼらけ(有明)	二五〇
	あさぼらけ(宇治)	四四
	あしびきの	四四
	あはぢしま	五一
	あはれとも	三七
	あひみての	二九七
	あふことの	三〇二
	あまつかぜ	二七
	あまのぼら	七三
	あらざらん	三六九
	あらしふく	四三

	ありあけの	三四
	ありまやま	三六五
	いにしへの	三九七
	いまこんと	一七三
	いまばたぎ	四〇九
	うかりける	四八三
	うらみわび	四一九
オ	おくやまに	六〇
	おとにきく	四七〇
	おほえやま	三九一
	おほけなく	六九六
	おもひわび	五七三
カ	かくとだに	三三八
	かささぎの	六六
	かぜそよぐ	七九
	かぜないたみ	三三〇
	ききみがため(春の)	一六
	ききみがため(なし)	三三〇
	きりぎりす	三六五
コ	こころあてに	三八
	こころにも	四三

	このたびは	一八四
	こぬひとを	七〇〇
	こひすてふ	二八八
	これやこの	一〇五
サ	ささびしさに	四五一
シ	しのぶれど	二八三
	しらつゆに	二七五
ス	すみのえの	一五三
セ	せをほやみ	五一六
タ	たかさごの	四七五
	たきのれば	三六〇
	たごのうらに	五八
	たちわかれ	一四
	たまのをよ	六八
	たれをかも	二五八
チ	ちぎりおきし	四九五
	ちぎりきな	二九四
	ちはやふる	一四八
ツ	つきみれば	一八一
	つくばれの	一三五
ナ	ながからむ	五五八

ながらへば	五八四
なげきつゝ	三三三
なげけとて	六〇四
なつのよは	二七三
なにしおはば	二二三
なにはえの	六三五
なにはがた	一五五
はなさそふ	六九五
はなのいろは	九一
はるすぎて	六
はるのよの	四七
ひさかたの	二五四
ひとはいさ	二六二
ひとをなし	七三〇
ふくからに	一九
ほととぎす	六〇
みかきもり	三三五
みかのほら	三三三
みせばやな	六三
みちのくの	二三
みよしのの	六八

ムむらさめの	六九
メめぐりあひて	三七六
モもろしきや	七五四
もろともに	四三
ヤやすらはで	六七
やへむぐら	三八
やまがはに	二五三
やまざとは	二六六
ゆふされば	四五六
ゆらのとな	三三
よのなかほ	六五一
よのなかよ	五七七
よもすがら	五九三
よなこめて	四〇一
わがいほは	八七
わがそでは	六九
わすらるゝ	二七七
わすれじの	三五五
わだのほら(漕ぎ)	五四
わだのほら(八十島)	二〇
わびぬれば	一四

ナをぐらやま……………三五

下旬七言

アあかつきばかり	二四四
あしのまるやに	四五六
あはでこのよな	一五五
あはれことしの	四九五
あまのをぶねを	六五一
あまりてなどか	二八一
あらはれわたる	四一四
ありあけのつきを	一七三
イいかにひさしき	三五二
いくよれざめぬ	五五一
いづこもおなじ	四五
いつみきとてか	三三
いでそよひとを	三八五
いまひとたびの(逢ふ事)	三九
いまひとたびの(御幸)	三五
ウうきにたえぬは	五七

サ	うしとみしよぞ	二八四
	おきまどはせる	二三八
	かけしやそでの	四七〇
	かこちがほなる	六〇四
	かたぶくまでの	六七
	かひなくたゝん	四七
	からくれなぬに	一四八
キ	きりたちのぼる	六九
ク	くだけてものを	三三〇
	くもかくれにし	三七六
	くものいづこに	二七三
	くもぬにまがふ	五〇四
ケ	けふこのへに	三九五
	けふをかぎりの	三五五
コ	こひしかるべき	四三三
	こひぞつもりて	一三五
	こひにくちなん	四九
	ころもかたしき	六五五
	ころもほすてふ	二六
	こゑきくときぞ	六〇
	さしもしらじな	三三八

シ	しづごころなく	二五四
	しのぶることの	六六
	しるもしらぬも	一〇五
	しるきをみれば	六
ス	すゑのまつやま	二九四
タ	たゞありあけの	五〇
	たつたのかはの	四二
ツ	つらぬきとめぬ	二七五
ト	とやまのかすみ	四七五
ナ	ながくもがなと	三三〇
	なが／＼しよな	四
	ながれもあへぬ	二五三
	なこそながれて	三六〇
	なほあまりある	七五四
	なほうらめしき	四六
ヌ	ぬれにぞぬれし	六三
ネ	ねやのひまさへ	五九
ハ	はげしかれとは	四八三
	はなぞむかしの	二六三
	はなよりほかに	四三
ヒ	ひとこそしらね	六九

ミ	ひとこそみえね	三八
	ひとしれずこそ	二八八
	ひとづてならで	四〇九
	ひとにしられで	二三
	ひとにはつけよ	二〇
	ひとのいのちの	二七七
	ひとめもくさも	二六
	ひとをみをも	三〇一
	ひるはきえつゝ	三五
フ	ふじのたかれに	五
	ふりゆくものは	六九五
	ふるさとさむく	六七八
マ	まだふみもみず	三九一
	まつとしきかば	一四四
	まつもむかしの	二五六
	みかさのやまに	七三
	みそぎぞなつの	七九
	みだれそめにし	一三
	みだれてけさは	五五八
	みのいたづらに	三〇七
	みをつくしても	一六四

みをつくしてや	六三五
むかしはものを	二九七
むべやまかぜを	一九九
ものやおもふと	二八三
もみぢのにしき	一八四
もれいづるつきの	五五三
やくやもしほの	七〇〇
やまのおくにも	五七七
ゆくへもしらぬ	三三三
ゆめのかよひぢ	一五三
よしののさとに	二五〇
よにあふさかの	四〇一
よなうちやまと	八七
よをおもふゆゑ	七三〇
わがころもでに	一三八
わがころもでは	一五
わがたつそまに	六六六
わがみひとつの	一八二
わがみよにふる	九一
われてもすゑに	五五六
ちをとめのすがた	二七

○作者

ア 赤染衛門	三六七
安倍仲磨	七三
在原業平朝臣	一四八
イ 祐子内親王家紀伊	四七〇
伊勢	一五五
伊勢大輔	三九七
和泉式部	三六九
殷富門院大輔	六三一
ウ 右近	二七七
右大將道綱母	三三三
凡河内躬恒	三三八
オ 大江千里	一八一
大中臣能宣朝臣	三三五
カ 柿本人麿	四四
河原左大臣	一三三
鎌倉右大臣	六五一
キ 喜撰法師	八七

儀同三司母	三五五
紀貫之	二六二
紀友則	二五四
清原深養父	二七三
清原元輔	二九四
光孝天皇	一三八
皇嘉門院別當	六三五
皇太后宮大夫俊成	五七七
菅家	一八四
ケ 謙徳公	三〇七
コ 後京極政太政大臣	六三五
小式部内侍	三九一
後徳大寺左大臣	五六〇
後鳥羽院	七二〇
權中納言定家	七〇〇
權中納言定頼	四一四
權中納言匡房	四七五
サ 西行法師	六〇四
相摸	四一九
坂上是則	二五〇
前大僧正慈圓	六八六

左京大夫顯輔	五五
左京大夫道雅	四〇九
參議 篁	二〇
參議 等	二八一
參議雅經	六八
三條右大臣	三三
三條院	四三
猿丸大夫	六〇
寂蓮法師	六九
從二位家隆	七九
順德院	七四
俊惠法師	五三
式子內親王	三八
崇德院	五六
周防內侍	四七
清少納言	四〇一
蟬丸	一〇五
僧正遍照	二七
素性法師	一七三
曾根好忠	三三
待賢門院堀川	五六

大僧正行尊	四三
大納言公任	三六〇
大納言經信	四八
大貳三位	三八五
道因法師	五七
平兼盛	六三
中納言朝忠	三〇一
中納言敦忠	二九七
中納言兼輔	三三
中納言家持	六
中納言行平	一四
持統天皇	六
貞信公	三五
天智天皇	五
二條院讚岐	三九
入道太政大臣	六五
能因法師	四二
春道列樹	三五
藤原興風	二六
藤原清輔朝臣	六四
藤原實方朝臣	三八

藤原敏行朝臣	一五
藤原道信朝臣	四六
藤原基俊	四九五
藤原義孝	三〇
文屋朝康	二七五
文屋康秀	一九
法性寺入道(前關白太政大臣)	五〇四
源兼昌	五五一
源重之	三〇
源俊賴朝臣	四八
源宗于朝臣	三六
壬生忠見	二八
壬生忠岑	二四
紫式部	三六
元良親王	一六四
陽成院	二五
山部赤人	二六
良暹法師	四一
惠慶法師	三八
小野小町	九

○逸話

ア 鶯宿梅	二七三
阿古屋の松	二七二
朝倉山木丸殿	二四
飛鳥井家懷紙の書法	六七九
敦忠の管絃	二九八
栗田の宮	五五〇
阿佛尼	七五
近江朝の令	二五
尼將軍	六七七
安樂寺の祭禮	二二〇
有子入水	五七〇
蟻通	二六六
イ 十六夜日記	七五
伊勢家を賣る歌	一六三
伊勢物語	一九九
嚴島の内侍上洛	五八六
稻荷詣に禊かる話	三七四

ウ 大目の少將	六八六
有心座無心座	六八八
うそかへ鬼取	二四
歌塚	五一
宇多帝伊勢を寵し給ふ	一五六
宇多法皇宮の龍遊覽	一七四
宇治川合戦	六四一
宇治勢田の合戦	七四〇
宇治橋合戦	三五
宇治山古蹟の話	八八
エ 叡山	六八六
江口の遊女	六三
沖の石の讃岐	六五〇
大海人皇子	三
大峯順逆の峯入り	四三六
大堰河三船	六四
表歌	五五
カ 強盜交野八郎	七三五
柿本栗本	六八八
覺阿	七四
蜻蛉日記	二五四

交野少將	二八〇
萱の齋院	六九
キ 金槐集	六七七
銀の猫	六〇九
桐火樋	五九
ク 公曉實朝を斬る	六七
貢米の船	五六一
花山僧正	二三
菅公の左遷	一九五
函谷關の故事	四〇三
ケ 源三位頼政の反逆	六四〇
源氏物語	三七七
全	三八二
玄象牧馬の琵琶	四六一
遣唐使	七四
コ 江家次第	四八〇
小式部内侍の詠歌	三九六
小町論	九六
伊衡伊勢の家に勅使	一五七
西行白峯詣	五四五
西行天沖川の渡の話	六〇七

西園寺	六九八
早良親王種繼を殺し給ふ	六九
嵯峨帝室の才を試み給ふ	一一一
狭衣物語	三六六
佐藤兵衛尉近宗の話	五三三
實方陸奥に流さる	三四〇
三十六歌仙	三六七
詞花集	五四四
侍從入道蓮如	五四四
柿本寺	五一
時平公の濫行	一八六
新羅國の人肥前に寇す	一四三
しめぢが原	四九六
尙齒會	五五五
順徳院佐渡國遷幸	七五五
駿馬の骨の故事	四〇八
俊惠の歌論	五九三
承久の亂	七三九
白川の關	四三〇
崇徳院阿波遷幸	五四〇
崇徳院御遷宮	五四九

七關の石門	四六六
ソ衣通姫の話	三
タ箕隱岐に流さる	一二三
忠平棗を好む	三三〇
忠見歌に執す	二九一
子鎮四八郎の話	五三三
陳和卿實朝に謁す	六六一
貞觀格式	一八九
ソ土御門院の卽位	七六八
鹽の石碑	六九三
ト獨鈷かまくび	五九〇・六三〇
土佐日記	二六四
通小町	九七
飛梅	二七
融の靈	一三四
ナ内侍有子	五五五
中大兄皇子鎌足と因を結ぶ	一七
仲麿安南へ漂著	六六
名なしの大將	五七〇
なるさの入道	五八一
ニ日本紀の局	三八一

ハ亡室體	七六八
博雅三位	一〇八
白龍魚腹の事	四六六
はだし馬の助	五七三
花がつみ	三四一
濱成式	二五七
ヒ久の松	五四八
人鷹の影供	五四
人鷹影供の祭田	五五四
人鷹畫像	五五一
人鷹塚	五四
フ深草少將	一〇〇
ふし柴の加賀	四四〇
二俣川の軍立	六五七
藤原頼長敗北	五三〇
筆柿の話	四六
船岡子日の遊び	三二三
ホ渤海國の相者王文矩	一三九
保元の亂	五二三
堀川艶書合せ	四七〇
マ牧の方	六六六

枕の草子	四〇七
政子靜に舞所望	七三三
まふりでの話	四三三
道眞の弓術	一八七
水瀬の社	七五三
源義朝父の首をきる	五五五
宮川歌合	六二七
宮の瀧	一七四
明月記	七二三
基俊俊頼の歌を難す	四九九
基俊俊頼の不和	四八九
元良親王の好色	一六五
文覺西行の對面	六〇八
陽成院の御狂亂	一二七
弓削道鏡	六二
維摩會	四九五
義孝兄弟の痘瘡	二七
義孝の戀物語	三三四
良峯と五條の女	二八
頼家足立景盛の妻を奪ふ	六五三
頼家伊豆に蟄居す	六五五

朗詠谷	六六
リ流泉啄木の曲	一〇八
口六條家	五五五
ワ我立柚	六六六
和漢朗詠集	三六七
井手の蛙長柄の橋の鮑屑	四七
工遠所歌合	七五三
小倉山壯	七〇七
小野篁の英才	二二

内容細目終

よろづに堪能ならずとも、一の道をつらぬき得たらむ人は、おのづからもの毎に渡りていとも尊くぞ覺ゆ。こよに百人一首といへる文は、そのむかしより今に傳り、稚きをはじめ、あまねく教と成りて、其いさを筆にも盡しがたきをや。さらに難波わたりなる尾崎雅嘉、彼えらびにあへりし人々の有つる事を、一夜の中にも世にしらしめんと、四方よものうみの玉藻のかずかずひろひあつめ、一夜がたりと名づけ、櫻木にちりばめ、ながく世につたへむとて、予にはし書がきを需む。實に身を盡し、ふかくもしける志のせつなれば、千ひろの竹のよゝもかはらず榮えむことをおもひて、いさゝかつたなき筆をそむるになむ。

花園 三位 公燕卿

波 龍 主 人

